
腹グロ王子と子羊ちゃんsideM 6

狐狸川ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腹グロ王子と子羊ちゃんsideM 6

【Nコード】

N4903I

【作者名】

狐狸川ころり

【あらすじ】

さてさて、前回はかなりオイシイ所まで漕ぎ付けた宏二くんも結局は守の純粹さ(?)に敢えなく撃沈。しかも、何やらお家騒動の暗雲がジワジワと二人を包围中!? さあ全ての伏線が回収されるのか? シリーズ6のスタートです!!

ユルイ目覚め。

宏二の誕生日を皆で祝った翌日。
殆んど雑魚寝状態の部屋で寝ぼけ眼の俺は、孜先輩の恐ろしい一言によって地獄に叩き落とされた。

「そー言えば。チビちゃん宿題終わってるー？」

響められた声に比例して、俺の目に映る孜先輩の顔は近かった。
フンワリと揺れた金色の髪が仰向けの俺の顔の上にある。

ソコにあるのは宏二によく似た極上の笑みを浮かべた天使。言っとくけど、前に“墮”が付く方ね。

前日に全ての脳ミソの機動力を使い果たしたのか、中々俺の頭は働かなかった。けれど、素直な俺の体は条件反射で胃を締め付ける。
……分かってると思いますけどね？今日までそんな精神的余裕などありはしなかった。大体、プールだとか海だとか夏休みである楽しみすら満喫していないこの有様。

つつーワケで、そりゃあ見事に終わってませんとも！！少なくともコノ一週間は皆無ですね！貴方様に言われるまで微塵も思い出しませんでした！！

盛大な眩暈に襲われる。

慌てて携帯のスケジュールで日にちを確認すれば、どーすんのさ、もう一週間とちょっとじゃねーか！！

思わず言葉を失った俺に、弱みを見つけた孜先輩の目がキラリと光った。

「じゃあさ…：僕が見てあげようかあ？」

ふふふ…と毒を含んだ甘い笑みを零しながら、孜先輩は自分の考
えに乗り気だ。

あ…そのだな、少なくとも前回までの教訓。

“孜先輩の優しさを真に受けるな”

それでどんな危ない目に遭うか知れたモンじゃない。だが非常に
残念な話、実際は背に腹は換えられないのが現状ですな！うん！！
…流石にどんなにバカな俺だって、宏二や彦根に頼むほど無謀じ
やないし。

大体ね？もし宏二に頼んだりすると…確実に宿題とは違うコトに
なるのは間違いない。しかも彦根になんか頼もうものなら俺の小遣
いが文字通り全部食い尽くされるコト請け合いだ。

ならば俺の選択は当然、選ぶまでもなかったりしたりする。

「お…お願いします…」

泣く泣くそう判断を下した。

世の中、何で要領のイイ人間と悪い人間が存在するんでしょうね
え？

ンな訳で以来俺は涙を飲んで宏二宅に泊まりっぱなし。現在、滞
在時間の記録更新中。

あーもう…ナンかすげえよ？

俺ってば受験の時でもこんなに勉強しなかった気がする。

何時もだったらお気楽に過ごす中内の家で過ごすタイムスケジュ
ール。だが今やソレは大幅に変わり、いわゆる夏休みバージョンへ
と変貌を遂げた姿はまるで地獄絵図。

まず朝、目が覚めれば朝食より先に英語、飯食ってからまた英語。それから昼飯挟んで数学と古文。ソで、就寝までは読書。モチロン、感想文用ね。

孜先輩、教えるのは上手いけど案外スパルタで手を抜かない。気が付けば宿題以外のモノなんかも勉強させられたりしていた。

なのでここ二、三日…俺は孜先輩が不在時にすっかりと宏二に甘やかされるクセがついてしまっている。

「守、おやつでも食べますか？」

「え、マジで！？あー…でも…孜先輩が怒るから……」

「大丈夫。孜なら夜まで戻りません。少し休憩を取った方がいいですよ？」

「ホント？わーいつ」

俺はアツサリとエサにつられて数学のドリルを投げ出し、目の前に置かれた好物の最中に迷わず手を伸ばした。

「なあ、ところで宏二ってもう宿題終わったの？」

「ええ。全て終了です」

「スツゲー…。やってる暇なんかあったんだあ」

「ありましたとも。守が俺をほっぽり出して、ハチたちとゴチャゴチャやってた時などは暇でしたからねえ？」

「うっ…！」

相変わらずなかなか痛いところを突いてきますね宏二くん！俺はコノ場を取り繕う様に急いで手にあった残りの最中を頼張った。

あんまり急ぎすぎた所為で、思わず喉に詰まる。慌てて冷たい緑茶を喉に流し込めば、どうにかこうにか命の危機を脱するコトができたみたい。

「守、口の端にあんこが付いています」

「え、ドコ？」

「ココですよ、なんて言いながら宏二の舌がぺろりと俺の唇の端を舐めた。」

「…っ！」

「取れましたよ？」

柔らかなその感触が、求肥入りの最中を喉に詰まらせるより俺の頬を赤く染める。

それを見られたくなくて、自然に皿へと伸びていた手を急いで戻すと、口に再び最中を突っ込んで急いで咀嚼して飲み込む。

「あ…ありがとう…」

とりあえず目を叛けながらお礼を言うものの、妙に宏二の作り出す雰囲気、二個目の最中を口に放り込んだ口の中より甘い。

コレは……？俺は直感的に貞操の危機を今更ながらに感じて、つい先制的に質問を投げかけていた。

「…も…もしかして、彦根も出かけてたり…する？」

「モチロンです。今朝、守が目を覚ますより先に出かけました」

無言で、しかも笑顔で見詰め合うこと約三分。

「宏ニクン！わるいがなあ、今の俺は全精力を傾けてコノ数式を解かなきゃならんだよ！」

「大丈夫です。それくらい、俺が教えてあげますよ？」

「じゃ、今すぐ俺の腰に回ってる手を引っ込めて、教えてくれるか

なあ!？」

「モチロンです。でも…先ずは互いに理解を深める社会学からですね」

「ばっ…やめ!あ…ン」

宏二はこうやって時折、彦根や孜先輩の不在時にちよつかい…つか、時間を忘れそうになる誘惑を仕掛けてくる。

しかも段々と根性でスルー…出来なくなつて来た今日この頃。

キスをされ、宏二の温かな指先が頬をなぞるだけでもゾクゾクと体が震える。思わず目を瞑り、薄く開いた唇の間から静かに吐息を吐いてしまう。

「守…これ以上焦らさないで下さい。このままでは、俺は欲求不満で死んでしまいますよ?」

「宏二…」

「最近の守は今まで以上に俺を駆り立てて困ります。仕草の一つ一つ…それこそ睫毛の先の動きですら、全てを俺の腕の中に閉じ込めてしまいたくなる」

「ばか…」

とは云え、頭の片隅にいる冷静な俺が軽くジャブ的なツッコミを己に入れる。

ココで流されたら、孜先輩に怒られる。

宿題が終わらなくなる。

ソレよりも何よりも…この際乙女だなんだと言われても、やつぱり初めて(終わってるナ…俺……)は、もっとムードとかナンかそんなのが欲しかった。

成り行きじゃなくて、流されるんじゃないかって、しっかりと、自分

の意志で納得してからにしたかった。

だから卑怯だと分かっていたいながら、宏二の胸に深く擦り寄ると体を強く密着させて囁いく。

「宏二。俺が、このまま宿題出来ないとマズイの、分かってるだろ……?」

これまた最近覚えた事。案外、宏二はコノ台詞に弱い。

「コレさえ終われば……な?」

別に何がどうって、ハッキリ言っただけではない。最初は孜先輩の入れ知恵だったのだが、案外簡単に引かかってくれぬ。

宏二くん、キミって意外と単細胞?

ゴクリと唾を飲み込む音と、ギョツと肩を抱かれるのが同時に起こり、深い溜め息一つ分の間があったから宏二は俺の体を解放する。

「……………分かりました」

いつもだったらココで終わりなんだけど、今日はジトツと恨みがましげな視線で続きがあった。

「言っておきますが……コレだけ俺を我慢させているんですから、当然、宿題を早く片付けてくれるんでしょうねえ?ね、守?」

「は、はああい……!」

思わずピンと背筋が伸び、お行儀よく座り直すと早速問題に取り掛かった。とは云え、宏二が俺に甘いのは周知の事実。

孜先輩より教え方はかなり優しい。

一つ一つ丁寧に問題の解き方を教えるばかりか、俺が分かるまで

“ 分かりやすい ” ヒントを幾つ もくれる。

孜先輩はたまーに意地悪く、回りくどいヒントばかりを寄越して俺を煙に巻く。モチロン出来た時は褒めてくれるけど、出来なかった時のけなし方もハンパない。

でも宏二は終始俺を褒めてくれる。出来なくても、頑張ったと褒めてくれる。

まあ今は時折下心を感じるが目を瞑るよ、この際。

なので、本日の課題分は予定より早く終了。ついでだから明日の分もやってしまおうってんで、頑張った。

しかしコトがそう簡単に運ばないのが現実ってもんよ。

ユルイ目覚め。(後書き)

随分と遅くなつてしまいました。漸く腹グロを再開しました！
しかし…狐狸川、情けなくも利き手が腱鞘炎になつてしまい、ペッ
トボトルの蓋すら明けられない始末(泣)
更新はかなり亀になるかもしれませんが、どうぞ最後までお付き合
い下さい!!!

新たな天敵。

その夜、ブスっとした脹れっ面で孜先輩が宏二に抗議していた。

「ちよつと、宏二！チビちゃんに甘いのは分かるけど、いつくら
ナンでもコレじゃ為になんないでしょ！？終わればイイってモンじ
やないの！！あとチビちゃん！コノ問題とコノ問題、明日やり直し
っ。分かった！？……分かったなら、二人とも返事は？」

「……ハイ」

「ははつめつずらしー。宏二が孜に怒られてやんの」

「…彦根だつて、人のコト言えないクセに」

「何のことかなー」

などと彦根は惚けているが、昨日俺に問題の解き方を教えて怒ら
れたのは…何を隠そうご本人様だ。

「大体ねえ！宏二も彦根もチビちゃんに甘すぎ！！チビちゃんも甘
えすぎ！！自分で問題を解きなさいっ！！」

「イエッサー！！」

思わず背筋をビシツと直して敬礼してしまう。

大体さあ見てくれ筋金入りの金髪ヤンキー様が手に数学のドリル
を持って、黒髪一般ピープルな俺に向かって仁王立ちの説教つてど
うよ。

モチロン、絵面が全面的におかしい。通常だったら逆だろ、みた
いな？それこそアリエナイ。なんだよ、この目の落ち着かない光景
……。

俺はフウと小さく溜め息を吐く。

すると目ざとい孜先輩が俺の溜め息を聞き逃すハズなどない。二

ヤリと楽しそうに邪悪な笑みを浮かべながら声高らかにお仕置き宣言。

「ナンだあ、もっと難しいのがやりたいって？しょうがないなあ。じゃああチビちゃん、さっきの二問に加えて応用問題二問追加ね。さあ、がんばろつかあ？」

「はいいい……」

孜先輩のイジワル。

その日、結局俺はチクチクと孜先輩のお説教を食らいながら、感想文の添削を受けたのでした。

結果？んなのモチロン、要再提出ですとも！

曰く全然中身を読んでない！のだそうだ。

そりゃそうでしょうとも。ぶつちゃけ最初の三行と最後のページしか読んでないんだモーン。

だつてさー。眠いし。

就寝前の読書って、眠気を誘うよね？しかも、感想文を求める現国のチヨイスだよ？日本のある意味古典文学だよ？

既に言い回しで俺はノックアウトだ。

意味わかんない。

仕方なしに俺は彦根へと助言を求めた。何でって…いつも何かの本を読んでるし、無難かなって思ったから。

ついに初めて通常締め切られたままである部屋の扉をノックする。ドキドキしながら待っていると、静かに扉が開かれて彦根が顔を出した。

「どつした？」

「えっと、その…」

俺は孜先輩がチヨイスした課題の本を彦根の目の前に翳した。す

ると、部屋の入り口に凭れ掛るように額を付けると、ニヤリと笑う。

「ふーん。解説を求める？それとも説明？」

「両方をお願いします」

「入る？それとも、止めとく？」

…なんだろう？変だな。

目を細めて、まるで誘うように言う彦根に違和感を覚えながら、俺は中に入るコトを選択した。

本能的に感じるキモチ悪さ。

彦根の顔で彦根の声なのに…どこかがメチャクチャ気持ち悪い。なので妙に緊張しながら恐る恐る彦根の薄暗い部屋に初めて足を踏み入れた。

すると扉が閉じて直ぐに押さえ込むように両手が壁に縫い止められ、ようやくさっきの違和感は確信へと替わる。

「案外、警戒心ないんだ？」

「意味わかんねえ…お前、一体誰だ？」

「彦根だよ？」

「ウソだ。本当に彦根なら、絶対こんなマネはしない」

「じゃあもし…本心がこうだったとしたら？」

「んなハズねえ、彦根は違う」

俺は睨み上げた相手の瞳の冷たさにゾツとした。

コノ家の誰もが、俺をそんな風には決して見ない。

もし…もしも万が一、本当に彦根が俺にこんなコトをするんだと

したら、きつと酷く悲しそうな申し分けないような顔をするだろう。

「アンタ、誰だ？」

「ふうん、真実の目…ねえ？なるほど、あの三人がイカれるのも無理はない」

「？」

「確かにお前の目は美しい。まあ…あの女の強さには劣るがな。でも…強いクセに妙な甘さがある…」

俺の手から文庫本が音を立てて落ちた。まるでそれを合図にしたように、男の顔が誘われるように近づく…が、ふいにピタリと動きが止まった。

「化けるなら、いつそもつと上手くやったらどうだ？」

不思議に思っただけで視線を上げれば、コピー商品も真つ青な瓜二つの顔がもう一つ。

一人は俺を押さえつけていて、もう一人はその人物の首にかなり大型なアーミーナイフを宛がっていた。

およそ刃渡り二十センチ。こうなると最早ナイフの域を脱して包丁レベル。台所にさり気なく置かれていたらそのままフツウに包丁立てに入れてしまいそうだ。

……… あー…ソノですね、彦根クン。助けてもらってナンですが…言ってもいいですか？

そのブツは確実に明らかなる銃刀法違反っスよー。ふつーに捕まりますよーマジで。

つつか、ソレってそもそも一介の高校生が持つてるレベルじゃないですかからね？ナイフの専門誌とかに載ってる紙面から出しちゃイケナイ代物だから。日常レベルで使ってイイの海外の傭兵さんたち位だからっ。

「案外、早風呂だな」

「ああ、長風呂は苦手だね」

「可愛げのないガキだ」

「ふうん？ならそのガキに後ろを取られたんじゃ引退でしょ？」

「ぬかせ……」

フンと鼻を鳴らすと、俺を押さえていた方が面白そうに口の端を上げて手を放した。

「おい、チビ。サツサと本でも拾って宏二のトコにでも逃げ込んでおけ。でなけりゃマジで犯すぞ？」

「お……おかっ……!?!?」

「おい、あんまりからかうなって。後で宏二に説教されても知らねーからな」

「そんなときゃ、耳に栓でもしとくさ。ほら、チビ。早くしろ」

「チビじゃねえ……!」

「ンじゃ、ガキ」

「がっ~~~~~!」

「止めとけて、守。勝ち目ないから」

尚も食い下がろうとする俺に、本物の彦根が苦笑しながら本を拾ってくれと、そのまま俺の背中に手を当て廊下へと押し出した。

「なにアイツ！なんだアイツ！ムカツク、超ムカツク……!」

「まあまあ、そう怒るなって。とにかく宏二の部屋に避難するのが得策だぞ？」

「ぶー！避難つつより、確実に危険レベル上がってンじゃんかつ！」

「嫌だったら悲鳴上げれば？助けてやるよ。……モチロン、学校の昼飯代で」

「誰が頼むかつ、ばーか!!」

俺は思い切りアツカンベーをして、ドストス足音を響かせながら短い廊下を宏二の部屋へと向かう。いつもどおり開け放たれたドアから部屋を覗けば案の定、相変わらず小難しい顔でベッドに腰を下し、小型のパソコンで何かをしている宏二が居た。

「はいるぞー」

「……どうしました？」

「彦根にココに避難しろって言われたんだよ」

「彦根に……？」

一瞬考え込む仕草をしたのも束の間、直ぐに納得した顔で頷く。

「ああ……なるほど。部屋に行っただんですか？」

「そーだよ!この、ワケわかんねー日本語を訳して貰おうと思ったの!」

「で、彦根が二人居た。…違いますか？」

「…んだよ。何で分かったんだ？」

「いえいえ、そうですか。守でも区別が出来ませんでしたか…コレは有望かも知れませぬ」

「でも!彦根じゃナイもう一人は気持ち悪いっ。しかもすっげームカつく!!俺をチビとかガキとか言っし!!」

俺が心底憤ってそう言えば、キョトンと目を見開いた宏二が、まるで意外な言葉を聞いたかのように口元をヒクつかせる。

「……っく……」

「く?」

「くっくっ……いえ、すみません……くっくくく……悪気は……はは……くっ

…アハハ」

「…なに笑ってんだ、コノヤロウ」

「いえ、その…ハハハ…アレがそんなコトを？」

「アレだかドレだか知らねーが、ハツキリ言われたともさあ！！」

「それは失礼致しました。他には何か？」

「んー？真実の目がどうか言つてメチャ至近距離に来られた」

つい今までの楽しそうな顔は引っ込み、ピクリと宏二の方眉が跳ね上がる。

「へえ？」

「そう。でも彦根が来たからソコで終わりだけどなっ」

フン、と胸を反らせると宏二がチヨイチヨイと手招きをした。俺は性懲りもなく呼ばれるままにベッドへと近付く。

宏二は今まで太ももの上に乗せていたパソコンを小脇に置くと、代わりに俺の腰を抱き寄せて座らせた。

「真実の目…そう言われましたか？」

「ん？ああ」

「ふうん…アレも案外迷信深いですね…」

「宏二？」

意味が分からなくて宏二を見上げれば、困ったように眉根を八字にして俺の頬に指を滑らせた。

「意外なモノです」

「？」

「…まあ云わば真実の目とは、俺たちの家系で言う所の言い伝えようなモノで。物心付くより小さな頃から大人によく聞かされて育つ

んです」

「ナンだよ、それ」

「そうですね……話したとしても、内容が分かり辛いのですが……」

そう前置きをした後で、宏二は酷くゆっくりとした口調でその“言い伝え”とやらを教えてくれた。

「昔：俺たちの祖先に当る人物になるのですが：生来の特異体質だったんですよ。その人の手記：所謂、日記みたいなモノに『真実の目』は私から力のみならず全てを奪った』と書かれていたそうです」

「うーん？」

「よく分からない話です。が、そのお陰で俺たちの家系では“目”を非常に大切に扱うんですよ。まるでソコに全てがあるかのように」

「へー……」

「さて、何処を教えてあげればいいんですか？」

全ての問題を塗りつぶすように鮮やかに宏二が笑った後、俺はそのままベッドの上で、一晩中読書と相成りました。

言っとくけど……！

何もなかったから！いつこもやましいコト、なかったからね！？

新たな天敵。(後書き)

亀の如き更新ですが、見捨てないで下さいね。：お願いします。
今回は守にある意味新たな宿敵登場！がんばれ守(笑)

宏則さん。

翌朝、俺は主の居ない広いベッドで目を覚ました。

ヤベエ、どうやら課題の本を枕にすつかりと眠り込んでいたようだ。キョロリと視線を彷徨わせるも目的の人物の姿は見当たらない。

「んん…うづ…じ……?」

のそりと起き上がり、広いベッドの温もりが自分の分しかないコトに気付いて何故かホンの少し傷付いた気がする。…別に構わないけど。

なのに下唇を噛むと苛立ちをぶつける様に、枕にされていた本が可哀相に俺の手によって白い壁に投げつけられた。

派手に音をたてて床に転がる本に罪はない。モチロン宏二にだって罪はないのだろう。

でも寝ている間に居なくなれるのは…まるで黒板を爪で引っかく音みたいに酷く不快だ。いや、不快どころかマジでムカツク。

俺が宏二の本当の寝顔を見たのは後にも先にもたった二回。まあ一度なんか狸寝入りだったけどな。

別にイイんだ。宏二が俺の知らないところで何をしていようが知ったこつちゃない。でも、相手が自分の知らない世界を持っているのがどこか寂しい気がする。

数ヶ月前まで知りたいとも思わなかったのに、今では宏二のコトをもっと知っていたいだなんて。ホント考えられねーよ。

「あああゝ…ばつかばかしい！」

ぐしゃぐしゃと髪を掻き混ぜてから、俺は食べ物でも物色しようとして台所に行くことにした。そう！腹が立つの腹が減ってる証拠なの

だ。きっと宏二のことだから何かを作って置いてくれているハズだろう。

アホみたいに緩慢な動作でベッドから這い出し、これまた相当ゆっくりと階段を下りた。

すると階段の半ばでリビングのソファに見慣れない人が座っているのに気が付く。直感でこの家の住人でないコトは理解できた。

見れば体格的に宏二とか彦根に似てる。でも雰囲気がかつと落ち着いていて、大人っぽい。まだ背中しか見てないから分からないけど、高そうなグレーのスーツがよく似合っている気がした。

しばし声を掛けるかどうするか迷うものの、ココに居るってコトはやはり挨拶をしないのは問題だよな？

「あ、あの…」

「ん？ああ、お目覚めの様ですね」

俺が歯切れ悪く声を掛ければ、その人は別段驚くでもなく、手にしていた新聞から目を上げて振り返った。

目の前に晒された顔に一瞬たじろぐ。ハイ、きたっ！ビンゴー！間違いない。確実にヒヤクパー血縁関係確定！！

うっわあ…あーもーナンだよこの家系！男はミンナこんな感じなのか？ナンだってこう顔が宏二や孜先輩にすごく似るとか、体格が彦根に似るとか…バリエーション少なすぎ。ンなんじゃいくら鈍感な俺ですら分かるわっ！

同じく美形でも女性陣はそれぞれ個性的なのにな？謎だよ、マジで。

「その、あの…はじめまして。俺は…」

「初めまして。キミが守クンですね？私は孜の父親の麻広…宏則ひろのりと申します。まあ…あくまで戸籍上で、ですが。ソレと実質的に孜、

宏二、彦根の叔父に当ります」

「ソレは、どうも」

「そう硬くならず。立ち話もナンですから、どうぞお座りください」

「はあ…」

変だな…おかしいな…妙な感じがする。宏則さんがこの部屋に居るだけで、まるで別の家に来たみたいだ。俺は何故か勧められるまに、宏則さんの前に座った。

しかもなんだろう…頭の片隅がチクチクと鈍い痛みを生んで嫌な感じだ。すつごく、嫌な感じがする。

本当は放って置いて欲しかった。けれども宏則さんは、さも当然とばかりに俺を相手として話しかけて来る。

「どうやら、ウチのドラ息子達がキミに迷惑をかけている様で申し訳ありませんね」

「い、いえ。迷惑だなんて…そんな…」

いつもだったら、話している人に目を合わせないなんてしない俺が目を合わせるコトが出来ない。

忙しなく自分の手元を見たり、相手の膝元を見たり…酷く落ち着かなくて出来るならば今すぐ逃げ出したかった。

まるでそう…初めて宏二に出会った時みたいに。

「しかも、夕里ですらキミを非常に気に入ってるようだ。コレは非常に珍しいコトなんですよ?」

「はあ…」

「守クン。どうしたのかな?顔を上げてくれなければ、まともに話せませんよ?」

「え、あ、は…ハイ!」

居丈高な教師みたいに咎める口調に思わず反射的に目を上げた。すると途端にまるで後頭部が後ろに引き下げられるように重くなる。合わせたハズの目がグラグラと…まるで地震の体感トレーラーに乗ってるみたいに揺れた。

「あれ…？」

向かい側に座っている宏則さんが二重にも三重にも見え、瞼が重くて半分瞑ってしまう。なんだ？必死に目を凝らし、宏則さんの顔を確認しようとした。するとまるで魚眼レンズで見るように左目が…左目だけがやたらと大きく見える。

「？」

「さて、自己紹介も済んだ事ですし…本題に入りましょうか？守クン」

どこか遠くで響く声、静かに自分の意識が潜っていく感覚。

まるでユラユラと波間を漂うように、自分自身を遠く感じる。質問される声、それに答える俺の声。

なのに聞かれている質問内容も、答えている俺の言葉もどこか曖昧でハッキリしない。

聞かれた瞬間は『知っている』と思う。そして答える。なのに、答えた途端にその質問内容が頭からスルリと抜け落ちる。

ああ…でもコノ感覚…懐かしい…。

前もどこかで…？そう…ずっと小さい時…こんな感じが…。

『…ン』

ナニ？

『…れ…る』

何？

『わす…れ…る』

何を？

『忘れる』

なに？ナニ？何を？

『記憶の奥底に閉じ込めて置け。そして、恐れる…』

なんでそんなコト言うの？アナタは誰？

『俺と同じ目をした者を…』

誰なの？

『拒絶しろ』

！！！！！！

「っ！？」

「おや、案外しぶとい様ですね？」

冷や汗が体中を流れ落ちる。

目の前に居るコノ人、この人は一体何者だ？

喉の奥がヒクリと動く。瞬く間に忘れていた筈の何かに、火が灯った。

こ…わ、い……。

こわい、怖い！

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い！！

嫌だ、怖いよ…誰か助けて…。

満、そつだ…満を探さなきゃ…。

怖い…。

満を…。

怖いよ…。

満、助けなきゃ…。

嫌だ…。

助けなきゃ…。

助けて…。

誰か、助けて……。

「や…ヤダ…！やだ、やだ、やだやだやだやだやだ！やだああああ
！！」

「ああ…成る程。拒絶ですか？…まあ、あの人のやりそうな事ではありますね」

頭を抱え込んで絶叫した俺を、宏則さんは当然とばかりに冷たく見下す。

「全く…後先考えないのは、あの人の悪い癖です」

ローテーブル越しにそつと伸ばされた手を、俺はソファの上へ逃げるように振り払う。

「やつ、やだ、やだ、やだ…」

ガチガチと奥歯が鳴り、体の震えが止まらない。今の俺を支配するのは真つ赤に染まった恐怖だ。

何がソコまで怖いのか、一体自分が何にここまで怯えているのか分からない。でも無意識に視線を泳がせて宏二の姿を探す。

せめて宏二でなくとも彦根か孜先輩でもいい。誰かに大丈夫だと言って欲しかった。

「怖い、やだ、怖い、やだ、怖い、怖い、怖い…宏二いつ…誰かっ…！！」

「やれやれ…当の本人がコレではもう何も聞き出せませんね。仕方ありません」

ふう…と残念そうに溜め息を吐く宏則さんが、苦笑して深々と席に身を沈める。ソレと同時に極小さくカチツと金属的な音が響いた。

「すまないね、守クン。どうやら君には迷惑を掛けっぱなしのようだ。私は出来るなら…君にも平穏な生活を送らせてあげたかったんですよ、本当です。…ああそつだ。コレは単純に私の個人的な興味なんですが…宏二は君に優しくしてくれますか？」

耳を塞いでいた手が、宏二の名前に反応する。

「孜は、君にムリをさせていませんか？あの偏屈な彦根は君を護ってくれていますか？…守クン、君は…」

いつ溢れ出したのか分からない涙が、俺の頬を濡らしている。怖くて見たくない声の主が、さっきのとは別人みたいで思わず顔を上げている。

今の宏則さんは苦しそうに顔を歪めて口をつぐみ、まるでジクジクと疼く傷を必死に両手で覆い隠すみたいに痛々しい。見ればその指の間からは抑える事の出来ない鮮血が絶え間なく溢れて濡らしているようにすら感じる。

「……私、は ……」

ふいに悔恨を吐き出すかの様に宏則さんが何かを言いかけた時、ガチャリとリビングのドアが開いた。

宏則さん。(後書き)

徐々に本題突入中。しかも今回、宏二が居ないし。ワリと守がピンチなのになあ？

記憶のふた。

普段だったら感じもしない風の揺らぎが部屋に流れ込む。

「あつれえー？チビちゃん、どうし…っ!？」

何時も通り気の抜けた声で入ってきたハズの孜先輩が、俺の目の前に居る宏則さんを見つけると射抜かんばかりの鋭い眼差しを湛えた。

宏則さんも孜先輩の姿を認めると、微かに自嘲的な笑みを洩らし、先程の苦しい霧囲気を瞬く間に打ち消して元に戻る。

「へえ、めつずらしー。…何しに来たの？」

「随分な挨拶ですね。親が子に会いに来るのに理由が要りますか？」

「ふん、ウソを吐かなくてもいいよ。ンで？一体チビちゃんに何してくれちゃったワケ？」

「別に何もしてはいませんし、指の一本も触れていません。まあ単にお前が帰ってくるまでの話し相手をしてもらっては居ましたがね。…ねえ？守クン？」

「ッ!?!」

そう言っつて穏やかな声で俺に話しかける宏則さんに、無意識に体が強張って逃げしまっつ。

「おや、どうしたのかな？」

気持ちの悪い不自然に張り付いた柔和な笑顔で席を立ち、当たり前のように伸ばされた宏則さんの手を孜先輩は激しい音を立てて叩き落した。

「あのさあ、あんまりチビちゃんに気安くしないでよね。それに例えどんな些細なモノだったとしても、アンタが宏二のに触れるのは許せないンだけどー？」

「おやおや、宏二至上主義は変わらずか。まったく…暫く顔を見ていなかったが、この様子では今でも宏二の影に隠れて泣いているのかな？」

「ふん。馬鹿みたいにたまにしか会わないクセに分かったような口を利かないでくれる？…用がないならサッサと帰ってよね」

「もちろんですとも。仮にも親に敵意剥き出しで噛み付くのはいただけませんが…まあ仕方がないですね。ではコレを。……最長老からの招待状です」

「なにソレ。意味分かんない。される覚えないケドお？」

「残念ながらお前にはなくても、アチラ側にはあるんでしようねえ……」

「じゃ……もし、行かなかつたら？」

「簡単ですよ。強力なエサをぶら下げるだけのコトでしょう？……」

先日より、もつと強力なモノを」

「へー…じゃあやつぱり、アレにはアンタも噛んでいたってワケ？」

「まさか。しかし、分かっていたとしても私には為す術などありませんよ」

「なにそれー、ヨク言うよ。アンタの言葉は信用できない」

孜先輩は俺を背に庇うように、宏則さんとの間に割って入る。

「そんなに警戒しなくても今は何もしませんよ。…仮にも父親をそんなに信用出来ませんか？」

「は？父親？いったい誰のコトお？」

「…まあいいです。取りあえずコレを宏二に…コレを彦根に。そして……コレをお前に」

「ねえ。あのさあ、なんで三人バラバラ？」
「さて？」

軽く肩を竦めてその場を立ち去ろうとした宏則さんが、素早く、それもほんの瞬きの間に制止する孜先輩の腕を片手で捻り上げ、次いで俺の腕を痛いほど掴んで引き上げると低く耳元で囁いた。

「君が恐れるのは何かな…守クン？」
「…！」

驚いて咄嗟に見上げた宏則さんの瞳の表情は、酷く悲しげで苦痛に満ちている。

「さあ……『開け』なさい」

まるで針が耳に差し込まれるような痛みと、それによって頭の中がグチャグチャに掻き乱される気分の悪さ。ぐにやりと視界が歪んで、体が傾いだ。

そして最後に聞き取れないくらい微かに『すまない…』と付け加えられる。きつと孜先輩には聞こえていない。

だが俺に与えられた言葉は瞬く間に記憶を蔽い隠していたものを焼き尽くし、見開いた目から止める事の出来ない涙を溢れさせた。

氷のような冷たい目。

引き上げられ、歪んだ口元に浮ぶ醜くて綺麗な微笑。

表面だけの、仮面の笑顔。

その…顔は…。

「あつ……うあつ……」
「チビちゃん！？テメエ！！チビちゃんに何をしゃがった！？」
「なに、たいしたコトはありませんよ。過去に閉じられた記憶を……
パンドラの箱を覗いてもらっただけですから」
「!？」

青ざめ引き攣った頬で孜先輩が俺を振り返り、俺はその顔を……
見た。

全身が強張る恐怖が体中を駆け巡る。

ドクリドクリと心臓を通る血液が冷たく凍って押し出され、全て
を鈍らせていく。

「っ……あ、う……あ……うわあああああ……!!……!!」

喉の奥から湧き上がる、痛みを伴う絶叫。

孜先輩が何かを言っているが、聞こえない。いや……聞きたくない
のかもしれない。

宏則さんが俺の腕を離すと、ブツリ、とソコで全てが闇に墮ちた。

何で今まで思い出さなかったんだろっ……？
忘れていた記憶。
いっそ、ずっと忘れていられたら良かったのに……。

目を覚ましたくない。
もう二度と、コノ目を開きたくない。

ソレは俺が六歳くらいの時のモノ。
まだ幼い満と俺は公園で遊んでいた。

その頃、両親は共働きで…年の離れた兄は部活で遅く、姉は満を保育園から連れ帰ってから空手の道場に行っている時間。

小さな満の手が俺の手を握り、俺もしっかりとその手を握っていた。もしかしたら当時、満が好きだったアニメの主題歌を歌っていたのかもしれない。

少しづつ空がオレンジ色に染まり、俺と満は家に帰ろうとしたものの、満がどうしてももう一度滑り台をやりたいと言ったので再び公園の中央に戻って二人で滑った。

なのに先に滑ったハズの満の姿が何処にも見当たらない。見失う距離でもないはずなのに。

キョロキョロと辺りを見回したその時、俺の目の前に数人の男達が立っていた。その一人の腕には、抱き上げられ口を大きな手で覆われた満。

俺は恐ろしいと思うよりもなによりも、咄嗟に満を助けなければと男に飛びついた。だが当然、子供の小さな体ではどうするコトも出来ずあっけなく捕まってしまう。

頭の上で両手を一まとめに持ち上げられ、腕の軋むような痛みと足の付かない不安定な状況で俺はパニックになった。

何かを叫んだかもしれない、男達に何かを言われたかもしれない。でも、ソレは全く覚えていない。

覚えているのは恐怖と、満を捕まえている男の放った一言。

『そのガキ…使えそうだな』

使う？使うって何に？

俺はどうなるんだろう？

満はどうなるんだろう？

もう、家には帰れないの…？

不安と恐怖が心と思考を支配する。

そのまま……俺も満も有無を言わず男達に何処かへと連れて行かれた。

記憶のふた。(後書き)

守クンの人生は案外、幼い頃からヘビーです(苦笑)

氷の瞳。

次に記憶があるのは、冷たいコンクリートで出来た薄暗い部屋。直接肌に感じる、ざらついた床から這い上がる冷気に身震いする。反射的に身を丸めて肩を両手で抱え込めば、触れるはずの身に着けていたモノはなく…代わりに聞きなれないカチャリと擦れた金属音と首に喰い込む何か。不安に駆られて周囲を見回せば、うつつらと浮かび上がった異常な光景。

恐ろしいコトに、等間隔で同じ様に壁から垂れる鎖に子供が数人繋がれているのが見えた。ソレはあまりにも現実味を欠いた世界で、何で服を着ていないの？とか、どうして首輪がつけられて鎖に繋がれているの？とか…すごく不思議だった。

ゾクリと鳥肌が立つ。

しかもよくよく目を凝らせば、少し離れた床に倒れ伏すように満も裸で俺と同じ様に繋がれている。俺はとっさに走り寄ろうとするものの、どうしても鎖の長さが足りずに傍に行けない。

いま思えば、まるで映画で見る奴隷市場のようだ。とは云え、当時はそんなコトは分からず、どうにか満の体を隠してやれないかと必死に考えた。

こんなに寒いのでは満が風邪をひいてしまう。

きつとその時の俺は今よりもつと子どもで、単純でバカだったから、そんなコトを考えられていたんだ…。

やがてどれ位の時間が経ったのか、もしくはホンの数分だったのかも知れない。いきなり視界を奪う強烈さで部屋が明るく照らし出された。

茶色い錆が浮いた重そうな鉄の扉が開き、見覚えのある男が俺たちを連れて来たのとは別の男達や、上品そうな女達を引き連れて入って来る。

ザワザワと何かを話しているが、全く意味が分からない。

そんな中、一人のにやけた若い男が満の傍に歩み寄るとおもむろに髪を乱暴に掴んで持ち上げた。俺は妹の苦痛の呻きで咄嗟に『やめろ』と叫んでいた。

すると、男は厭らしく歪めた口元で俺にビチャリと唾を吐きかけた。

『ウルセーぞチビ。俺がこのガキを買ったんだ。どんな扱いをしようが文句を言われる筋合いはねーんだよ』

買う。

そのんな聞きなれたハズの単語が、激しく俺の全身を打ちのめした。そして何を思ったのか、男は後ろの方に立っていた男に大声で尋ねる。

『おい、倍出してやる。ソツチのガキも買わせる』

『悪いがソレは非売品でね』

『チツ、シケてんなあ』

『だが、注文どおりのガキを調達したんだ。文句を言うなよ』

『ふん、まあいいさ。金は払ったんだ、サツサと外せ』

『ハイハイ…』

目の前で再び知らない男に連れて行かれようとしている満。

俺は必死に叫んで手を伸ばした。満も俺の声で目を覚まし、泣きながら小さな手足を使って暴れて俺を呼ぶ。すると満を買ったと言った男がウルせえ！と、満の頬を平手で叩き、その衝撃で満の体はぐったりと床に投げ出された。

俺は自分が殴られたワケでもないのに、ショックで頭が真っ白に

なって、がむしゃらに満の傍へ行こうと両手で鎖を引く。首に食い込む首輪の痛みも裸足の足を傷付けるコンクリートのざらつきもまるで気にならない。

だって鎖から離され、男に吹き飛ばされたお陰で満の体が俺の手の届く所まで来ていたのだから。伸ばせる限りに腕を伸ばす。何とか指先が満の髪先へ触れ、もつと、と手を伸ばしかけた瞬間…残酷にも満は拾い上げられ、だらんと頂垂れた。

男は俺の伸ばした指先を硬い靴のかかとで踏みにじる。

『オイ、チビ。もし…お前が売りに出されたら俺が買ってやるよ。そうすりゃ運命の再会ってヤツ？まあ…最も、ソレまでこのガキが生きてればってな？』

耳を塞ぎなくなる嫌な晒いを残して男は立ち去った。それと共に入り口の向こうに消えた満。

もう、手が届かない。

絶望とは…こんなモノなのだろうか。

まるで目の前にストンと幕が落ちるように、全てを失う。

次々に周りの子供たちも鎖を外され、連れ出されていく。最後に残ったのは…俺、一人だけだった。

『安心しろ、お前は大事な道具だ。俺が直々に仕込んで、立派な人形に育ててやるよ…』

ジリジリと男が俺に近付き、俺の前髪を掴んで顔を上に向かせた。

『お前の目は“アレ”に似ているからなあ？』

正直、言ってる意味などホンの少しだって分かりはしない。けれども最低限、このままでは二度と家族に会えない事と満が危険な目に遭っている事だけは理解できた。

『お願い。何でも…何でもオジサンの云うコト、聞くから。だから、満だけでも家に帰して…』

『ああ？残念だな、坊主。見てたる？お前の妹はな、売られてったんだよ。それにお前が俺の言うコトを聞くのは当たり前だ』

そう男が言い放った途端、先程とは逆にブツリと部屋に闇が落ちた。明るさに慣れた目には直ぐには何も見えない。

そのくせ、音だけは鮮明に届いた。

緊張で研ぎ澄まされた耳に、硬い靴音と純粹に音声と感じるモノが響く。

『…腐った口でも良く動くな』

『！！』

次第に闇に目が慣れてくれば、視界を遮るのは恐怖に歪んだ男の顔。それだけじゃない。見る間に俺の髪を掴んでいる男の腕が震えていくのが分かった。

『い…いつの間に…』

男は手馴れた動きで素早く俺の首から鎖を外すと、盾になるように自分の前に抱きかかえて振り返る。

『何で“アンタ”がここに！？……へへっまあイヤ。自らコッチに来てくれるとは助かったぜ。なあ…？見るよこのガキ。“アレ”』

の目に似てんだろ？もうアッチは使いモンになんねえんだ。見逃してくれよ…このガキをやるからさあ！』

男の言葉とは裏腹に、俺の体は更にキツク肌を密着するように抱き締められる。まるで、俺の存在が命綱であるように。

漸く目を凝らせばその先につつすらと浮かび上がる、白いシャツにジーンズを履いた一人の男の姿。

酷く印象的な冷え切った表情のない瞳。それが宿っているのは薄い笑を浮かべた、まるで型で取ったような整った顔。その上、張り付いた綺麗な偽りの笑顔が吐き出すのは、感情が一切排除された抑揚のない平坦な声。

俺の小さな足は空を蹴り、男の腕に抱えられている。

そして無情にも、氷のような瞳でもう一人の男が命じたのはたった一言。

『…死ぬ、カス』

ソレを合図にしたかのように、俺を抱えた男の体がギシギシとロボットの様に軋むと、甲高い力チリ…パン！！という乾いた音が響いた。

同時に上がったのは生理的に塞ぎたくなる、耳に突き刺さる悲鳴。頬に落ちた吐き気が込み上げるほどに濃厚で生温かい又メリを帯びた鉄臭いモノ。

その時の俺に出来るのは、只ひたすら恐怖で萎縮したまま崩れ落ちる男の下敷きになることだった。

重く押し掛かる男の体と次第にヒタヒタと俺の体を濡らしていく黒いシミ。この時、初めてリアルな人の死に直面して余りの恐ろしさで声を発するコトも出来なかった。

やがて潰されるようにしている俺の鼻先に黒い革靴の先が近付き、感情のない薄っぺらい声が降ってくる。

『オイ。生きてるか、チビ』

俺は辛うじて自由な首を小さく動かせば、大きな手が俺の髪を引っ張り、数本の髪が切れる音と共に引き摺り出されてゴミのように投げ捨てられる。

己を染める深い血臭に、きっと俺はドコか感覚が麻痺していたのだろう。痛みより何よりすぐさまその男の冷たい瞳を真っ直ぐ見つめ、縋るように言葉を投げつけた。

『オジサン。俺の妹を助けてよ。俺、何でもする。何でもするから妹を助けてよっ…』

初めて男の瞳が揺らいだ。まるで面白い漫才でも見たように、冷たさはそのままだが目を丸くして微かに笑い声を洩らしたのだ。

『チビ、お前は俺が怖くないのか？』

『怖い。…でも、妹を助けてくれるなら、怖くない』

『妹を助ける代わりにお前を殺すと言ってもか？』

『満が…妹が家に帰れるなら』

『お前は帰れないぞ？』

『でも、満は帰れる』

『だがお前は帰れない』

『満は…俺より小さいんだ。俺の…妹なんだ。俺はお兄ちゃん、だから』

『それだけか？』

俺は大きく頷いた。

『生意気な…』

そう言ってなぜか男は面白そうに晒い、片膝を付いて俺の顎を掴んで上を向かせる。

『ならばお前には厄介な獣を三頭、面倒見て貰うとするか』

妖しく色を放ち揺らめく瞳。

『……………まあ…せいぜい喰い殺されないように気を付けるんだな、坊主…』

「……………」

氷の瞳。(後書き)

いやぁ…書いている最中にPCがぶち壊れまして…(泣)

大変、お待たせ致しました!!

次回はようやく宏ニクンの登場…になる予定です!

暖かな腕。

ゾクリと耳の後ろの毛が逆立つ感覚と共に、俺は目を開いた。気付けばソコは見慣れた天井で、見慣れた部屋で……いつのまにか見慣れた宏二が心配そうに顔を曇らせている。

「気がつきましたか…」

気遣うように伸ばされた手をとっさに以前のようにな身を引いて避けてしまった。なぜって…俺を見詰める宏二の顔と、さっきの記憶の男の顔がダブって見えたから。

でも違うんだ。誤解しないで欲しい。

宏二が怖くてそうしたワケじゃない。俺の中で記憶と現実の差があまりにも近すぎたせいだ。

だから目の前に居るのが本物の宏二だと分かった途端、バカらしさまでの安堵感に突き動かされて半泣で自からしがみ付いた。

「……っっ！」

「まもる…」

どんな時でも、温かく柔らかかにフワリと抱き締める優しい腕。

お陰で冷えて固まった心がほぐれ、全身から力が抜ける。併せて深く記憶に残った吐き気を誘う血の臭いではなく、宏二が身に纏う爽やかな香りが胸いっぱい広がった。

「……ば…か… ああ！どこ…っ行ってたんだよ！ばか、ばか…ばか
ああ」

「申し訳ありません。随分と怖い思いをさせてしまったようですね」

はあ…と苦しげに深く吐き出される吐息。

「本来なら…本当に好きであるならば…俺はココで潔く身を引くべきなんでしょう。ですが…残念なことにこの期に及んでも、俺は守を一秒たりとも離したいなどと思いません。守の居ない世界など考えられない。俺とも在るう者がどうしたらいいのかわからないんです。このままでは、守の命すら削ってしまうのに。まったく勝手なものですな…」

しかし言葉とは裏腹に、更に俺を抱き締める腕に力が籠もり、声の響きには一切の苦悩も迷いも感じられない。

それどころか、更に俺の心を攪るように深く絡め取ろうとしているようにすら思える。でもなぜかな？ソレを感じていながら、嫌な気分がしないんだけど。

恥ずかしさというか照れというか…バカみたいに耳まで熱い。だから俺は、とりあえず精一杯に虚勢を張って宏二を睨み上げた。

「ふん！ナメんなよ。どーせ俺の寿命はバカみたいに長いに決まってるんだからな！ンなんでちょっとやそつと削れたくらい、どうってことはねーっつの」

第一アレだ。認めたくはない気もするけど…今や俺は伊達や酔狂で宏二にキスをされてるワケじゃない。

そもそもな一時の気の迷いや遊びなんかで…そんな中途半端な気持で…あっあんなコトっ…！出来るわけないだろうっ…！？

でなけりゃ、ほんの少しだろうとお前に…って、ん？あれ？おやマズイ。

意識したこともない己の心の声に一瞬だけ怯むも、毅然として宏二を睨み続ける。

「？」

「そつそれに！だいたいだなつ！お前こそ忘れてんじゃねえ！中途半端に逃げ出すのは許さねーって言つたろ！」

「本当ですか？……このまま、一緒に地獄に堕ちても？」

「オモシレーじゃねーか。だったら地獄の鬼とリアルに鬼ごっこだ！」

「ふ……ソレは相当鬼が手を焼くでしょうね……」

「当然だな！」

とか言いながら、ふいにもっと宏二の温もりを感じたくて両脇に腕を通して抱き締めた。強く押し当てた耳に、せわしない鼓動が流れ込んでくる。

気づけば相手の鼓動より、もしかしたら若干早いかも知れない自分の心臓に恥ずかしくなつて顔を上げれなくなった。

う……ん……どうしよう……！

そんな迷いに誘われるように宏二の指先がヤワリと頬に這わされ、緩やかに上を向かされる。と、いきなり唇を合わされた。

「ふっ……あ……」

あ……ヤバ。ゾクゾクする。

なんて考えていたらぼすん、と小さく耳元で音が聞こえ再び天井と宏二の顔が視界一杯に広がっていた。

「これって、怪我の功名……ってヤツでしょうか？」

「へっ！？」

きゃー！いやあ！おーそーわーれーるーっ！っつか、襲われてるっ……！

ねえっちよつと！宏二クン！？

「まって！ま、まってえっ！」
「なぜですか？」

そう真顔で聞き返されれば、にわかには常識に囚われた己の思考パターンが恥ずかしくなる。

「だから…その…えっと…えっと…っ！！」

言えるか！ばか！！

やっぱりちよつとはムードが欲しいとか、シャワー浴びたいとか、ふ…二人きりの甘い時間がもつと欲しいとかっ！

んなの、恥ずかしくって言えるかー！！

「んう~~~~っ！！」

これでもかっつてくらい、顔が熱くなって口を真一文字に引き結ぶにつちもさつちも行かないコノ状況、さあどうするっ！？

いい考えなんかちつとも思いつかなくて、わたわたししていたら、ふ…と、意地悪く優しく微笑んだ唇が額に落ちてきた。

「冗談ですよ。もし…もしもこれが全てを消す助けになるならば迷いはしません。ですが違うのでは意味がない。……………今は休む時です」

「へ？」

「ゆっくり眠って下さい。大丈夫…今度は目が覚めるまで、ずっと傍に居ますから」

「…………っ！」

っつぎやあぁー！

知ってたけど…どんだけ甘いんですか、アンタ！！

ゆっくりと俺の髪を梳く指先も、向けられた柔らかな笑みも、全てが甘くて甘ったるすぎて、絶対「糖類ゼロ」なんて信じられない。こんなんじゃゆっくり休むどころか、逆に意味なくカロリーを消費してしまいそうだよ。なにより今度はドキドキし過ぎて目を閉じるのが怖いって、なんのこっちゃ……。

助けて欲しいような欲しくないような…そんな複雑な心境が読まれないように、勢いに任せて宏二の胸に再び耳を付けるように引付いた。

ほんの少しだけひゅっと思を吸い込む音が耳に響いたけど、それ以降は規則正しい呼吸音と心臓の音が妙に心地よかった。

ゆったりと流れる時間が、このままずっと続いて欲しい。
思わずそう願った。

でも、忘れちゃいけない中内家でのセオリー。

そう！！あの無駄に陽気な金髪のお兄さん！

カチャリとノックも何もなく、いつも通りに意味がわからないくらいハイテンションで乱入してきた。

モチロンその後ろには呆れ顔の彦根が立っている。

「はっあーい！ソコの子犬ちゃん、甘え過ぎは厳禁でちゅよー？その飼い主くんは安全じゃないからダメダメでしゅからねー？ンで！その飼い主くんは今度は本日お薦めのコチラ、強面ワンちゃん彦根くんとラブラブデートお！じゃ、ソッコー連行でヨロシクうー！」
「はあ？…ったく。誰がワンちゃんだ、このアホ！行くぞ、宏二」
「つと…ムゲ…！！！」

「ごっめんねえ？せえっーかくのラブラブの時間、邪魔しちゃってえー！」

有無を言わず、彦根が宏二の口を塞いだかと思うとあっと言う間にズルズル引きずって部屋から姿を消した。

いってらっしゃあーい！と伸びやかに手を振って見送る勉先輩の後姿がほんのり痛い。しかし、俺を振り返った顔はびっくりするくらい深刻だった。

「あの、さ。チビちゃん…その…大丈夫？」

「え…？うん、大丈夫」

「ちよつと前と違うな、とか、変だなーって思うところは？」

「うーん？」

「そうか…よかった」

いつも通りに言葉を交わせば、ようやくホッとしたようにヤワリと笑って、今度は孜先輩が俺の頭を撫でた。ホント、コノ家の奴らは俺の頭を撫でるのがよくよく好きだと見える。

そのうち摩擦で擦り切れて、歳で禿げる前にスキンヘッドになるんじゃないか？

「何もなければそれでいいよ。…ホント、よかった」

「どうしたんですか？」

「ん？ああ…うん、ちよつと…ね」

妙に歯切れ悪く言葉を切って、少しばかり迷うように視線を彷徨わせてから俺を見下ろす。

「実はこんなのってさ、騙してるみたいでヤなんだけど。でも…いい加減チビちゃんだって疑問に思ってるコト、いっぱいあるかなーって。だってさ…不思議だと思わない？例えばなんでチビちゃんが気絶するくらい宏二を嫌いだったか、とかさ」

「それは…」

今度は俺のほう言葉が濁した。今となっては思い当たる節がないでもない。

でも、なんで急に？

手の平にひやりと嫌な汗が滲む。

「んつと…さ。正直、チビちゃんが変に思っコトないって言うから、それでもイイかと思っただけ…でも、調べた方がイイかなってコレって僕の推測だけさ。もしかしてチビちゃん…過去に死ぬほど凄く怖い思いをしたんじゃない？しかも普段は綺麗サツパリ忘れていて、ほんの少しだっと思い出さなくて、そんなコトがあったっコトすら忘れてる。違う？」

孜先輩の言葉に胃の底が一気に冷やされ、ぎくりと体が強張った。

「…う…ん」

「やっぱね。…正直言うとソレ、きっとチビちゃんの中では“なかつたコト”にされてたんだよ」

「えっ」

は…？なかつたコトにされてたっつて、ソレって一体どういうコト？覚えて居たくないから俺が忘れていたんじゃないの？

ダメだ…分かったと思っただのに、どんどん混乱していく。

「ちょっと待って。されてた？なかつたコトにされてた…て…」
「そんなの簡単だよ。人為的にその記憶に蓋をしたっつてコト。でも隠しきれない、か…ワザと残された部分で反応した。チビちゃんが嫌いなっつて、人前に立つ時の作り笑いの宏二でしょ？実は…過去にその顔にとっつても良く似た男が居たんだよ」

孜先輩の俺を試すような言葉が、再び思い出したある人物に繋がっていく。

「もっと細かく言うと、僕と宏二と殆んど同じ顔で、彦根と同じ体格の男。ココまで来ればさ、いっくら鈍いチビちゃんだって分かるでしょ？」

ああイヤだ…聞きたくない。

キリキリと舌の付け根が痛み、とっさに耳を塞いでしまう。なのにあっさりと孜先輩の声は俺の手を通り貫けて来た。

「……僕らの本当の父親だよ」

ああ…やっぱり……。

嫌な予感は大抵当たるモノだと相場が決まっている。ビクリと体が引き攣ると同時に、耳に甦る生々しい男の声。

『……厄介な獣を三頭、面倒見て貰うとするか』

暖かな腕。
(後書き)

うん。

残念ながら、宏二は強制退場！(苦笑)
がんばれ宏二！明日はある！……たぶん。

続きの記憶。

ならば…だったら…あの人は……。

「僕が思うに…チビちゃんは過去、あの男と会っている。でなければ、あんなに完璧に記憶を閉じ込められない。それにさ、宏則が来たのが証拠…かな？最長老も宏則も知らない、チビちゃんとあの男、二人だけの関係“パンドラの箱”の中身を覗き見るために」

「は？なにソレ。パンドラの…箱？」

「うん、そう。神に与えられた決して開けてはならない禁断の箱。

いわゆる、僕らにとつてのチビちゃんとあの男との関係だよ。でもどうやらソレが長老達にとつて大事な事らしいよ？だってさ、宏則はアチラ側では有能な尋問官だからね。デモ…」

いつもバカみたいに陽気な孜先輩の表情が、初めてに等しいくらい冷たく凍った。そしてその瞳の奥にゆらめく青い炎のような威圧感に、やがて圧倒されて飲み込まれていく。

「アツチは紛い物。でも…コツチは本物。僕が引き出し、彦根が制し…宏二が統べる。信じる信じないは任せるけど。僕らはね、チビちゃん。多少語弊はあるけど、一言で言えば生まれながらの催眠術者なんだよ。そして、通常の人間が使う催眠術と違うのは…記憶のみならず相手の生死すらも自在に出来ること。勝手言っただけ…さ。もう一度ちゃんと思い出してもらえないかな？チビちゃんがああ男、^{ひろかず}宏一と会ったあの日を……」

俺の返事を待たずにグラリと意識が揺らいだ。でも意識を失うとは違う。

宏則さんの時は、後頭部が後ろに引き下げられるように重くなり、

視界が激しく揺れた。ついでに目の前に居る宏則さんが二重にも三重にも見え、静かに自分の意識が潜っていく感覚だった。

けれども孜先輩のは全然違う。

なんだろう、まるで直接意識を優しく指先で撫でられているみたい…。気持ち悪さと気持ちよさが混濁して良く分からない感じ。

自分の言葉も行動も全て、何もかもが自分と切り離され孜先輩の両手に掬い上げられてしまっている。でも完全に切り離されているワケじゃなくて…ホンの少しだけ自分で自分の行動や言葉を選ぶコトが出来ない妙な窮屈さがある感じ。

「ごめんね、ホントに悪いとは思うんだ。でも…チビちゃんだったこのままじゃ気持ちが悪いだろ？それに僕らも知っておいた方がイイ気がするんだよ。だからチビちゃん…聞かせて？」

俺はひたすら孜先輩の声が導くまま言葉を発する。でも不思議だな…宏則さんの時みたいに恐怖に囚われる事も取り乱す事もない。

思い出すのはさつきとまったく同じ光景。

でも恐らくより鮮明に細部まで思い出している。臭いも痛みも全てまるでその時に引き戻されてその場に居るみたいだ。

なのに、怖くない…。

そしてついに、さつき目を覚ました場所を通り越し、続きを思い出す。

『チビ。付いて来い』

俺は男の後に付いていく。いや…正確には付いて行こうとした。なのにどんなに必死に立ち上がろうともがいても、力の抜け切っ

た足腰は云うコトを聞かず、体に張り付いた赤黒いヌメリに滑っては床に崩れ落ちる。

それに気が付いた男はしばしその様子を眺めた後、どんな表情を浮べていたのか分からないが、いきなり俺の体を小脇に抱えて歩き出した。

『……………うめ…なぞ…い』

俺は蚊の鳴く様な小さな声で呟く。モチロン、それに対する男の反応は一切ない。

果たしてドコをどう通ったのか。俺はいつの間にもやら車の座席に押し込まれ、薄く開いた窓越しに男がボソリと、誰かに指示を出す声を聞いた。

『……………届けて置け』

『はい』

従順に答える複数の声は兄貴の声に近い若さではある。が、何処か現実味を欠いた平坦さが気持ち悪かった。だって覚兄あやむすこはもつと感情が豊かで、子供らしい感じだったから。

俺は現実からワザと意識を反らすようにボウツと窓の外を眺める。肌寒さも何も感じない。ソレこそ幼いからだろうか？不思議と己が何も身に付けていないのを恥ずかしいとも何とも思っていない。

頭を占めるのは満のコトばかり。どうか無事に家に帰れるように…酷い目に遭っていないように…俺は只、祈るしか出来なかった。

段々と体のあちこちで薄皮が引っ張られるような不快な感覚に支配され始めたころ、車は滑る様に静かな音を立てて走り出した。

着いた場所は白くて大きな建物で、再び俺は男に小脇で抱えられ中に入って行く。

『…なんですか？ソレは』

『拾った。洗って連れて来い』

『珍しい事もあるものですね』

男は俺の体をもう一人の男の腕に押し付けて、何処かに消えた。

『拾った…ねえ？』

そう呟いて、男は俺を小脇に抱え直してから歩き出す。視界一面に白い布がヒラヒラと動くのが見えた。

次に俺がまともに関かを見たのは淡く湯気の立ち昇る風呂場。一人の儂げな雰囲気の水の人が俺を綺麗に洗い、温かな湯船に浸けて優しく頭を撫でてくれる。

『大丈夫よ。もう怖くないから…』

頭の上から降ってくる柔らかな声は、きつとももの凄く張り詰めていたんだろう…俺の神経を緩めさせ、元から小さかった体を更に縮めるみたいに膝を抱えて派手に泣いた。

そうしてひとしきり泣き終わった後、俺は大きすぎるスリッパを履いてその女の人に手を引かれながら無機質な真っ白の廊下を歩いていく。

『ココで、待っていてね？』

そう手を放されれば心細く、俺はつい縋るように女の人のスカートを握ってしまった。

『大丈夫よ安心して。怖くないわ…直ぐに迎えに来るから、ね？』

やんわりと手をスカートから離されると、淡い笑みを浮かべたその女の人はもう一度、俺の手を二つの手で包み込むように握って一枚の扉の向こうへ消えて行った。

静まり返った真っ白な廊下。

まるでこの世で残っているのが自分だけみたいで…心細くて怖くて、俺は床に座り込んで自分の両肩を抱き締めた。

一人で居るのは好きじゃない。

ウチの家族は皆、賑やかで何時も誰かが居たから。だからまるで人気がない静かなガランとした空間に、どんどん自分を吸い取られていくみたい。

一人はイヤ。

だって自分が誰だか分からなくなるから。

一人はイヤ。

だって…自分の存在がなくなったように感じるから。

でも。

ともすれば賑やかな家族の中で一番小さい俺は、皆が相手にしてくれなければたった一人になってしまう。

だからもしも。満が居なかったら……。

ソレを肌で感じて分かって居たからこそ満が生まれた日、俺は初めて幼い心の中に己の必要性を感じたんだ。

もし、満が俺を『にーた』と呼んでくれなかったら…今の俺はきっと存在しなかった。満がいたからこそ、自分を他人を信じられた。なのに。

今やその満の無事はおるか生死も分からない。そんな中で、どう

やって自分を保っているのか分からなかったんだ。

自分の命と同じか、それ以上の者を失う痛みを俺は心の底からの恐怖と捕らえた。

誰にも見てもらえない、必要とされないなんて…寂しくて死にそうだ。

だから、一人は嫌い。

『チビ。立て』

『っ!?!?』

堅い革靴の先で太腿を軽く小突かれる。慌てて見上げれば、あの氷のような男が立っていた。

『宏一さん、相手は小さい子なんですから…』

さっきの女の人が男を窘める様に言うと、俺の体を抱えるみたいにして立ち上がらせる。俺は身に纏っている布…手術前に着せられる両サイドを紐で止めるようヤツの裾をギュッと握った。

『来い』

男はぶつきらぼうにそう残すと、クルリと背を向けて歩き出す。俺は一瞬躊躇するも見上げた女の人が小さく頷くのを見て、頭を一回下げると与えられたスリッパを脱いで裸足になって小走りに男の後を追った。

その後、また車に乗り込めば今度は何処かの家…だろうか？に連れて行かれる。

部屋のカーテンは全てビツチリと隙間無く締め切られ、暗闇の中にテレビの明かりだけが煌々と青白い光を放っていた。

とても異様な光景。

『座れ』

『…はい』

言われるまま、手近にあるソファへと腰を下す。すると、男が一瞬思案するように立ち止まり、直ぐに姿を消した。

他に見るものがないので音の消されたテレビをボンヤリ眺めていれば、頭の上にバサリと大きな白いTシャツが落とされ、目の前の白い皿の上に無造作に焼かれていない食パンにベーコンエッグがのった物を置かれた。

『着て、食え』

『あ…はい』

男はそれだけ言うと、一つだけテレビに向けられている一人がけのソファに腰を下して黙り込んでしまった。ちょうど俺から斜めに

見えるそのソファは、男の姿を微妙に隠している。お陰で微かな安堵感と開放感から急いで着替え、出された物を頬張った。

でも悲しいかなTシャツが大きい所為で、襟元から片方の肩が出ているし、袖がパタパタとして動き辛い。それでも、さっきの布よりまだ服を着ている感じがするのと、何より空腹には勝てなかった。

『う、ご馳走様でした…』

おずおずと男の方へ声をかける。すると男は再び立ち上がり、空になった白い皿を持って部屋を出ると、今度は手に大きなコップを持って帰ってくる。

『…飲み』

出されたのは温められた牛乳。俺は頷いてゆっくりとそれを口に運んだ。それを見た男が今度は俺の前に座り、ジッと見詰めてくる。落ち着かなくて、目を伏せた。すると間髪入れずに男が命令する。

『目を上げる』

『っ…はい』

穴が開きそうなほど目を覗き込まれ、動けなくなった。そして男はゆっくりと口を開く。

『お前は、何でもすると言ったな？』

『…はい』

『コレは俺とお前だけの秘密だ。これから先、例え誰に何を訊かれても…何をされようとも言ってはならない。分かるな？』

『はい』

ソコまで来て、俺は瞬間的にまるで光が走り抜けるように全てを
理解する。

そっだ…コレは言うてはいけないんだ。

誰にも。

絶対に。

言うてはならない……。

続きの記憶。(後書き)

もう、完全に月一更新ですね…(汗)
すみません！

孜先輩の独白。

ブルリと体が震えた。

「っ……！！！！」

「チビちゃん？」

「……あ」

怪訝な表情で孜先輩は俺を見ている。クラクラと眩暈がして、まともに体を立てていられない。

「話が途中だよ、続きは？」

「え……と……」

孜先輩に促されると、思わず口を開きそうになる。けれども、直ぐに口は縫われたようにピタリと開かなくなった。

言わなければならぬ、でも言ってはならない……その両方の強制的な状況で、段々と気分が悪くなってくる。

ああ……ヤバイ。なんだか吐きそう。

頭に木魂するのは宏一さんの声。

そして孜先輩の声。

思い出したから……そう……全部。

だから、俺は話せない。

だってコレは話してはいけないから。

……誰にも言ってはいけないから。

……話さない、約束だから。

「ごめんなさい。

ごめんなさい…孜先輩、コレだけはどうしても話せない。

「ごめ…な…さ…っ」

「ちょ…！チビちゃん？どうしたの！？」

最後に忘れろと言われた。

しかしソレは俺の受けた血に濡れたアノ忌まわしい記憶だけ。

だが決して忘れてはならないのは…宏一さんとの絶対に守らなければならぬ約束。

『チビ…。忘れるなよ？』

決して違える事のない、契約に近い…満と俺の命を引き換えにして交わした、たった一つの約束。

「……ごめ…ん…」

「ちょっ…顔が真っ青だし！…って！？もしかして」

孜先輩は心配そうに眉間に皺を寄せ、直ぐに苦い顔付きになって短く舌打ちした。そして直ぐに頭をガリガリと大げさに掻くと、盛大な溜め息と共に隣に腰を下して俺の頭を小脇に引き寄せる。

「……そうか…なるほどねえ…。あゝやられたっ。宏則には拒絶を僕らには沈黙を…か。やってくれるじゃない、あのヤロウ！あゝもく！負けたっ！こりゃ宏二じゃなきゃ手に負えないや…僕じゃムリっ！」

ギブアップ！そう叫んで、孜先輩は俺の頭を再び優しく撫でた。

「お疲れ様。ムリさせちゃってゴメンね、チビちゃん。…少し寝る？」

「ううん、大丈夫」

「そっか。んん…なら…さ。悪いけど、迷惑ついでにちよつとだけ聞いてくれるカナ？」

妙に改まった口調で言われれば、なんだか変に緊張する。だから俺は黙って頷いた。

「どう切り出してイイのか分かんないケド。宏二…うん、そう、宏二は…さ？己を殺して周囲の期待を受け入れるしかなかったんだ」

孜先輩の言葉の意味が分からなくて、俺は首を傾げた。

「ねえ…自己を犠牲にしても誰かを護るって、どう云うことか分かる？」

「……」

「宏二は僕と彦根を護るために…あ…ちよつと違うな。そう、僕ら全てを護る為に、が正しいかな？平気で自分を犠牲に出来るんだよねえ。うん。きつとチビちゃんに会わなければ、宏二は誰もその中身を埋められないまま…ずーっと心が空洞の状態で一人で立ち続けなければならなかったんだ。宏二は…長老達の蒔いた過去の遺

物を自分の手で終わらせようとしている。その過程で生まれた者たち全てを自分の庇護の下に置いてね」

ふう…と小さく息を吐くと、孜先輩は悲しそうに口元を歪める。

「だから…さ、信じてやって欲しいんだ。これから何が起きてても、宏二のことを。きっとこれから想像できない位に、チビちゃんはとっても嫌な思いをする。だってチビちゃんが生きてきた世界と、僕らの世界は余りにも違い過ぎるから。もしかしたら ……」

「普通の世界は僕らにとって、あまりにも遠過ぎるのかもしれない…」

ポツリと寂しげに漏れた呟きが宙を舞った。

「ははっなんちゃってー？」

しかし直ぐに思い直したかのように、ペロリと赤い舌を覗かせて、悪戯っぽく笑う孜先輩は何時もどおりだ。

でも、最後に鋭い視線で俺を見据える。

「それと！オマケ情報。僕らはさ、十五になると問答無用で生殖可能か調べられるんだよ。でさ、夕里は知らないんだけど…僕は完全な無精子症で彦根は僅かな可能性。だから僕ら直系の中でパーフェクトなのは宏二だけ。ぶっちゃけ、この数十年…幸か不幸か僕らの家系の自然出生率は下がり続けているんだ」

冷めた表情で孜先輩は淡々と言葉を続ける。俺はといえば、先日の夕里さんの言葉がグルグル頭の中で回って指先が急に冷たくなっ

「…私たちは…特殊な血統を守るために、己の意志とは関係なく宛がわれて子供を産み出す動物 ……」

あの時は驚きであんまり深く考えていなかった。でも今になってその言葉がにわかにも現実味をおびて、重く心に押し掛かってくる。

「だからさ、いわば宏二は僕たち一族の存亡を掛けた貴重な存在ってヤツ？今時笑っちゃうよねー？江戸時代じゃあるまいし。直系の子孫を残すのに躍起になるなんてさあ？けど、そのおかげで本来は戸籍を持たず、どっかにペットとして売られる筈だった僕や、傭兵みたいに金で命を晒さなければならなかった彦根が宏二の意向で、ココにこうして居られる」

「……」

「だから忘れないで。僕と彦根は、宏二の為ならば何でもする。例えどんなに汚い仕事だろうと、宏二の為ならばどんなコトだって…する。宏二が黒を白だと言えば、目に映る真実よりも僕らはその言葉を信じる」

いつもオチャラケている孜先輩からはとても想像が出来ない、鬼気迫る迫力が全身を覆っていた。

嘘だとか、冗談だとかで、こんなに重苦しい胸の内を吐露するだろうか？少なくとも、俺の知っている孜先輩はそんな人ではない。

「ねえ…？これから先さ…僕らの吐きそうな位メチャクチャ汚い本当の姿を知っても、チビちゃんは傍に…居てくれる？」

悲しそうに下げられた眉は、まるで怯えきつた捨て猫みいだ。それに今の言葉は質問と云うよりは、弱々しい懇願に近い響き…。

とてもじゃないけど、いつも俺を翻弄してからかっている孜先輩

からは想像できない。

ああもう…悔しいなあ！こんなに切ない顔をされて突っぱねられるほど俺は冷たくなれない。

つつい護ってやりたくなる。例えその姿が偽りだったとしても。

「んつと…よくわかんないけど…。でも、俺は孜先輩が好きだし彦根が好だ。それに…今更自分の気持ちに嘘を吐けるほど、俺は利口じゃないよ…」

本当は世界中の涙を掻き集めても足りないくらい、泣きたい気持ちでいっぱいだったけど。精一杯ぎこちなく微笑んでみせる。

きつともう、俺は先輩たちから目を背けて逃げられないほど…ミナナを好きになってるんだ。

「ん…」

ふんわりと少しだけ肩の力が抜けた孜先輩は、ポンと俺の頭を軽く叩くとコドモみたいに笑った。

「アリガト」

しおらしい素直な言葉。しかし、だからと言って本来持ち合わせた意地悪な気性が消えたワケではない。

「おっと！そうそう、言い忘れてたコト思い出したあー」

えーつと。ハイ、先生。

今までの話の流れ上、静かに聞かなきゃなんないコト位よく分かってます。しかし、一応は己の精神衛生保持のため…心の中で叫ばせて頂きたいと思います。

まったく、ドンだけ人を驚かす隠し玉を持ってるんですか!? アン
タはっ!!!

孜先輩の独白。(後書き)

相変わらず孜は孜で、守は守…(苦笑)
二人の関係は恐らくずっとこのまんま。

冗談にもほどがあるっ！

不意に向けられた、無邪気な天使の意地悪い笑みに怯む。

あー…その、なんだ？ぶっちゃけかなりお腹一杯なんですけどっ！？

「な…なに？」

「んーとお…室尾さん。チビちゃんのお兄ちゃんね、昨日からウチの病院に入院中〜」

「は？」

うおおい！！チヨット待て、それってまさかの超特大級の爆弾投下じゃねえかつ！？そもそもあんな丈夫と根性と体力だけが能のアホが入院！？

お前、なにあっさり忘れてんだよ！結構ソコ、重要だろ！？

「はっ…はあああ！？なに、アイツ何したの！？」

「…さあ〜あ？詳しくは本人に聞いてねえ？で。お見舞い行く？」

「うっ！…いや…まあ…その…一応は身内、ですから…」

「ンじゃ、カツコ飯の彦根くんがお供しますので、行ってらっしゃあ〜い」

「ん？」

カツコ飯って…？ピンと来た嫌な予感。 孜先輩が無駄に優雅な仕草で入り口へと腕を伸ばせば、のそりと顔だけ彦根の例のムカツク男が現れた。

「お前らって、マジに人使い荒れーよな？少しは年上を敬え。つつか、ナンで俺がこんなチビの子守よ？」

「しつかたないデシヨ！？僕ら超人気者だから忙しーのよ」

「専門外」

「文句ならば宏ニヘドウゾ」

「……ったく、やってらんねー。オイ、そこのチビ！モタモタすんな、早くしろ」

それだけ言い残して男はサツサと姿を消す。俺は傍に居る孜先輩の胸倉を縫るように握って涙目で訴えた。

「先輩！俺、アイツ嫌い！！」

「大丈夫、大丈夫、獲って食われやしないから………多分」

「わああ！ナニ、その無駄な溜めはナニ！？多分ってなに！？怖いんですけどー！！」

「だあいじょうぶ、だあいじょうぶ。………多分」

「だから、多分って！？多分って！？」

「いってらっしゃーい」

「いっやああああ！！」

背中を押されて強引に部屋を出されると、抵抗虚しく一階の駐輪スペースまで連れて行かれ、問答無用でヘルメットをズボつと被せられる。

「安心しろチビ。お前相手じゃ勃つモノも勃たネーよ」

「うっわあ！！ナニ、コノちょー心休まる安心感！？マジで冗談じやねー！！孜せんぱああいつー！！」

「だあいじょうぶ、だあいじょうぶ！いってらっしゃーい」

「ヤだつてええ！！」

「黙れ、チビ」

「うっわあああんっ！オニイー！アークーマアアー！！」

俺の最大限の抵抗虚しく、結局は彦根（仮）のバイクのケツに乗せられて出発してしまった。しかも人生において初めての二ケツだよ！つつか、バイクなんか乗った事ねーって！！！！

こええ！！チヨー怖え！！！！

運転が乱暴とかそんなんよりも、足が着かない不安定な乗り物で…しかも、不信感で一杯の人間が運転してるんだぞ！？

一体、ドコのナニ様が心底安心して乗っていられるかつーの！！ヘルメットの所為で流れ出た涙を拭う事も出来ずに、ひたすら力一杯目の前の背中にしがみ付いた。

なので目的の場所に着く頃には俺は完全に呆然自失。彦根（仮）に促されるまで、着いたコトにすら気が付かなかった。

「チビ。イツまでしがみ付いてる」

「へ…？」

「ふん…そんなに俺にくっ付いていたいのか？」

「まさか！滅相もゴザイマセン！！！！」

慌ててバイクの後ろから飛び降りてみれば、膝がガクガクと大笑いして、夏の灼熱の日差しに焼かれたアスファルトへと前のめりに崩れ落ちる。

とっさに付いた手の平は、目玉焼きができそうなハンパない熱さ。驚いて今度は思いつきり尻餅を着いてしまった。

「のわあああつ！つつか、あつつつ！！！！イテッ！」

「……ぷっ」

「~~~~っつっ！！！」

あろうつことかヤツは俺から顔を背けて吹き出しやがった…くそ！どーせ笑うなら思いつきり笑えよなああ！

ジリジリと尻を伝い上がってくる熱に涙を浮かべ、まるで親の敵

を見る目で睨み上げる。

「おいおいチビ、いい加減に尻を上げないとケツが焼けるんじゃないか？」

「おわっ！」

再び立ち上がろうとするも、生まれたての子鹿並みに足が震えてヨタヨタと右へ左へ…終いにはスタート地点へ逆戻りで、バイクに跨ったままの男の膝へと抱きついてしまう。

「ふっ…よっほどオマエは彦根が好きか、俺が好きだようだな？」

忍び笑いならまだしも…いや、ソレもソレでムカツクが、おおっぴらゲラゲラと笑われて気分が良い訳などありやしない。

さすがにブチ切れて文句を言おうと口を開きかければ、次はワザとらしくヘルメットを力任せにグイと引っ張られた。

「いてっいててっ…！いてっ…！」

なにしゃがるー！首がもげるだろーがっっ！！

「てめっっ…！！…！」

「チビ」

からかいなのか何なのか、いつつも周囲に弄り尽くされているせいでその判断が難しく、怒りを感じつつも冗談として受け流すつもりで見上げる。しかしソコにあった目は、思わずゾワリと背筋に冷たいモノが滑り落ちるには十分だった。

「宏二も彦根も孜も…ガキのお遊びの範疇を知ってる。だが、敢え

てソレを超えてまで、ぬるま湯で育ったオマエをコツチに引き入れるなら……俺たちも容赦はしない。死にたくなければ今すぐ消えろ」

まるで能面みたいに無表情な声は、フルフェイスのヘルメットを通して剥き出しの敵意となつて、俺へと振り下ろされた。

「簡単だ。夕里ならな。……宏二ですら疑う余地もないほど完璧に『オマエ』を消してくれる」

「…なつなんだよ、急に？ンなこと、アンタが口を出すコトじゃないだろっ！？」

言われている意味がまったく分からない。

そりゃ確かに人間、生きていれば本能的に好き嫌いの一つや二つは存在する。でもだからといって、他人の人生を決める理由にはならないハズだ。

「ガキが…第一オマエみたいな素人が俺たちの中に混ざればどうなるか知ってるか？真っ先に消されるんだよ。少なくとも、俺だつたら狙いやすいお前みたいなヤツから消していく。特に相手にダメージがあると分かれば分かるほどな。足手まといは要らない、そんなヤツを護るなんて真っ平ごめんだ」

「ちよっ…待てよ！俺は…」

「遊びじゃないんだよ、チビ。俺たちの生きている社会はゲームでも、絵空事の世界でもない。オマエが想像しているより、惚れた腫れたなんて言つてられるほど甘くないんだ」

「てっ！」

ズボツと音が出そうな勢いで今度こそヘルメットを剥ぎ取られる。

「第一、マジに宏二に惚れてるなら、彦根や孜を大事だと思つたら

ば…オマエは尚更コツチ来るべきじゃない。これ以上アイツらを惑わせるな」

「!?!」

ちよつと、待て。惑わせるって、どつという意味だ？

そう問いかけを発する前に、目の前の男はおもむろに取り出した己の携帯の画面に目を走らせ、軽く息を吐いた

「……一時間後、迎えに来る。ソレまでにオマエの答えを決めておけ。少なくとも、マトモな頭がその小さい体に付いていれば……分かるだろ？」

まるで幼子を諭すような言葉を投げ捨て、そのまま男はバイクのエンジンをつかして走り出そうとする。だから俺はその音に負けないくらい、大声を張り上げてヤツのシャツの裾を引っ張った。

「待ちやがれっ!?!?!」

「なんだ？」

「俺の答えを一時間も待つほど、オマエは気長な人間じゃないだろ!?! 答えならとつくに決まってる。俺は宏二や彦根や孜先輩と離れる気は、ない!?!」

そう…数ヶ月前の俺だったら、こんなに素晴らしい話はないと確実に飛びついたらう。だが今は違う。

男は俺の目を逸らさずに見つめ…微かに笑い声を上げた。

「ふ…ん……。ならば言っておく。もしヤツラの誰か一人でも欠けてみる…俺は迷わずお前を殺す」

「だったら俺も言っておく。俺がお前たちの世界を知らないのと同じくらい、オマエは俺を知らないっ!?!」

失う恐怖は……もう嫌と言うほど知っている。だからこそ、彦根や孜先輩を……宏二を失うことなど、絶対するもんか。

「だから、誰かが死ぬなんて、軽々しく言うな！！俺は……俺はっ！！そーいう冗談だけは、大っ嫌いなんだよっっ！！」

「……………」
「ダレに何を言われようと、関係ない！！俺は変わらない！生きてる世界が違つとか、育つた環境が違つとかっっ！！どいつもこいつも、口を開けばソレばっかだっ！めんどくせーっつの！ンなんクソ食らえだっつーの！！第一そんなモノに負けるほど、俺たちは弱くねえんだよ！！分かったか、ぶあっかやろおおー！！！！！！」

叫んだ喉の奥がジンジンする。

するとなぜか男の雰囲気少しだけ和らぎ、苦笑だと分かる声を発して乱暴に俺の手を己のシャツから引き離す。

「コレだからガキは嫌いなんだ。聞き分けがなくて頭が悪い。………これから俺を呼ぶときはケンと言え。一時間、きっかりだ。ここで待ってる」

ブオン！と大きくエンジンを一度鳴らして、ケンと名乗った男は去って行った。残された俺は脳天をジリジリ焼く太陽に晒して、その後姿が見えなくなるまで思いつきり睨み付け、本当にガキっぽくアツカンベー！！とやってから、病院の中へと入った。

「たたくもおおー！！スッゲーむかつくっ！！」

いや、ムカツクを通り越して、まるでゴジラが腹の中で暴れまわっているみたいだ。

そんな笑っちゃうくらいかなり物騒な心境にも関わらず、陰しく眉間に皺を寄せた俺に病棟の受付のお姉さんがヒジョーに心温まる

励ましの言葉をかけてくれる。

「大丈夫、ボクがそんなに心配しなくても室尾さんは元気よ！安心してねっ」

や、大変申し訳ないんだけど。

実は俺ってソコまで兄貴を心配してないから。ってか、この皺は不機嫌によるものですからっ！！なんて、心の中だけで突っ込んでおいて病室を確認してからエレベーターへと乗り込んだ。

ブッチギリでバカだろっ。

それにしてもあのバカ、ナニをしゃがったんだ？

このままでは心配よりも先に文句が口を出てしまいそうだ。

イライラと落ち着かない腹を抱えながら、目的の階に着くと受付で言われた通り、ナースセンターで面会人の用紙に名前を記入する。すると長い髪をキチンと纏め上げた、かなり若い看護師さんが俺の名前を見て声をかけてきた。

「あら。室尾つて…もしかして室尾覚さんのご家族の方？」

「え、あ、はい…」

「え…つと？」

「弟、です」

「まあ！えらいわねー！小学生？一人で来たの？お母さんは？」

「は？しよ…しよ…うがくせい…いいい！?!？」

頬が盛大に引きつった。冗談抜きで、今のは初めての発言だぞ…。

「……………ひ…一人です」

「そう…お兄さん、入院初日にお母さんが一度見えたきりだから、きつと寂しがつてるわよー？病室はココを真っ直ぐ行って、突き当りを右の個室だから」

「…はっ…はい、ありがとうございますっ」

そそくさと俯いたまま、微かにざわめくナースセンターを振り向かず、サツサと兄貴の病室へと乗り込んだ。

「まったくあのバカ！！普段からドンだけ目立った生活してやがんだよーっ!?!？」

「恥ずかしさも手伝って、個室だという部屋の名前を確認すると、」

ノックもせずいきなりドアを開けた。

「おい！！こんつのバカあに……」

「あら、守くん！」

「へ……?????」

聞き覚えのある声に驚いて目を上げれば、左目に痛々しげな包帯巻いた夕里さんがカルテを片手に立っていた。

「あれっ夕里さん！？」

「ふふ、室尾つてどこかで聞いたと思っていたら、守クンの苗字だったのね。久しぶり、元気そうでよかったわ」

「つてか、ちょ……！どうしたんですかっ！！その……」

「ああコレ？うん、ちょっと……ね。そうだ！せっかくだから、後で私の部屋に来てお茶でもどう？」

「え……？」

「まあ積もる話は後でゆっくり。私の場所はナースセンターで聞けば、直ぐに分かるから。では室尾さん、くれぐれも安静に。以降は医師の許可なくベッドから出て筋トレはしないようにしてください。いいですか？」

「……は、はいっ……！！」

ベッドの上に背筋をピンと直角に伸ばした兄貴は、鬼気迫る目付きで夕里さんをガン見している。つて………おいおい、一体なにその目？もしかしてタイムマンでも申し込もうってのかよあ……。

「オイ、コラ！ソコのバカ、目付きが最悪！！」

「っ……！！」

ビシッと指差しながら入れた俺の突っ込みで、兄貴は大慌てでお

気に入りのキ イちゃんのクッションへと顔を埋めた。そもそもが、周りを埋め尽くす全てのグッズが ティちゃん。

いい年ブチ超えた強面筋肉バカ男が、女子中高生なら許されるフアンシーな又イグルミとクッションに埋まっているのだ。マジぶっちゃけ、身内だって相当キモイ。

「じゃ守クン。後でね？」

「あ、はいっ」

ニツコリと苦笑混じりで俺に微笑んだ夕里さん。ほんつと、悪辣な映像をお見せして申し訳ありませんでした。

ところが彼女が部屋を後にした途端、言いつけをすっかり忘れたゴリラがベッドから跳ね起き、俺の体を力の限りギリギリと抱きしめる。

「まっもたああああん!!」

「っだああ!!何しやがる!!!!こっ…のっ!!元氣あまってんじゃねーかつ!はなせ、バカあつつっ!!!!」

「だつてえーだつてええ〜!!まもたん、俺のキューピットじゃないかああ!!」

「はっああああ!!?」

ピタリと熱い抱擁から放されて、じいいつと穴が開くほど見詰められる。

「な…なんだよっ…!!」

「やあ、我が弟ながらいつ見ても可愛いなと」

「あ?…マジ殺すぞ、このバカ!」

「だがしかし、夕里先生は天使を飛び越えて女神だ!あんなに美しい人が、この世に居ただなんて!!しかも、可愛い我が弟の知り合

い…何たる行幸…！」

「おいおい何言ってるんだよ…そりゃ、知り合いにもなるだろ？だって孜先輩のお姉さんだしね」

「のぁ…！ソノ話はマジか…！」

「…え？…まさか、知らなかつ」

俺の問いかけで、それこそ電源の落ちたロボット並みに兄貴が瞬きもせずに固まった。

「おい？もしも…し？あにき…？」

幾ら目の前でヒラヒラ手を振っても再起動しないので、しばしの思案の後とうとう俺は最終手段をとってみた。

マジ超すっげー恥ずかしいけど！

「…ち…ちとにい？」

ずーっと、ずーっと、遙か昔の呼び方。

極うつすい記憶の中で、確か小学校の低学年くらいまで兄貴のことをそう呼んでいた覚えがある。

するとどうやら蚊の鳴くような俺の声が届いたらしく、聞こえないはずのギューーンという起動音と共に再び俺の体を息が出来ないほど強く抱きしめてきやがった。

「ぬおおお…！」

「ぐっ…！」

「可愛すぎるっ！可愛すぎるぞおおー！！夕里先生の限度を超えた美しさも有り得ないが、いまの守の可愛さは言語を絶するっ！！」

「だぁぁ…！つつか、テメーは本気で俺を絞め殺す気かぁぁぁぁぁ？」

ベイン！と空いている手で、思いつきり兄貴の頭をぶん殴った。
マジで今回は生命の危機を感じたぞ！？

「あうっ！」

「このままじゃ、テメーが入院するより俺が入院するだろがっ！！
つてか第一、ナニが理由で入院したんだ！？オマエはよっ！！！」
「うっ……………！そ…ソレは……………」

兄貴はパツと手を離して、するうっつと視線をあらぬ方向へと泳がせる。

アヤシイ。

絶対、怪しいだろーよ、なあっ！？俺は兄貴の妙な動きに目を凝らす。落ち着かない感じでソワソワと伸びをしたり、いきなり軽いストレッチを始めたり…終いにそそくさとベッドへ戻っていった。

「オイ、コラ！返答はどうしたんだよっ？」

「え、ナンのコトかなあ？」

「ほう？ナンですか、俺に言えないような真似をしたんですかね…
？アナタ様は」

あからさまに兄貴の肩がギクリと強張る。

「……………あ・に・き？」

「え〜と、はい…。いや、別にたいしたコトではなく…って……………その…あの…」

「ナニ？」

「はいっ！！さ、最近、守があんまり家に帰ってないって聞いたから…その、ちょ…ちょこつと心配で…こつそり守の部屋を捜査しに入ったら、満に見つかって…光が帰ってきて…二階の窓から放り投

げられて…ンで、そのショックかなあ…？盲腸になっちゃって、緊急入院しちゃいましたっ！」

一拍、一呼吸分だけ病室内がシンと静まり、俺と兄貴は顔を見合わせた。オドオドと俺の反応を疑う視線。

俺は俺で、別に後ろめたくもないけど顔から火が出るンじゃないかと思うほど、真っ赤に染まってブルブル震えていた。

まあ…とりわけコレと言って見られちゃマズイモノがあったワケでもないのだが。それだつて無断で自分の部屋にコツソリ忍び込まれて気分がイイ訳が……ない！

「…へ……変態っ！！マジでオマエなに考えてんの！？ちよーブツチ切りでプライバシーの侵害じゃねーかつ！」

「わああ！！ごめんなさい、ごめんなさいっ！！！」

ベッドの上で兄貴は、そのでっかくて威つい体を出来るだけ小さく丸めていた。

でもだからって消えてなくなるわけでも、見えなくなるワケでもなく…むしろ目を覆いたくなるような、ファンシーなグッズに身を埋めた気色の悪いオブジェが出来上がっていた。

題して、 ティちゃんと筋肉バカ。

クラクラと眩暈がして、思わず眉間を揉んでしまう。

どーりで満や姉えちゃんが来ないワケだよ。それに母さんが一回しか来てないってのも納得するね。

「………ったく！思春期の娘を持った口下手な親父じゃあるまいし、ナニやってんだよ！もう！！」

「すみません、申し訳ありません、ごめんなさいいい……」

「で、いつまで入院なワケ？」

「確か…残り一週間だったと思うんだけどなあ…。えっ、も、もし

かしてまた来てくれるのおっ?」

「ばーか。誰が来るかつーの!でも、まあ…暇だろつから雑誌とか本とかくらいは差し入れしてやるよ。ただし、文句は言うなよ?」

そう言っつて虚勢を張るものの、相手がデカイ分だけどうしたつて上目遣いで見上げてしまふ。すると兄貴は、感極まった顔でベッドから再び跳ね起き、またまたクソ熱い抱擁をすごい勢いで寄越しやがった。

「ま…まもたああんっ!」

「っだああ!!ウザイ!離れる!!」

気恥ずかしさから逃げ出そうと、身を振ったのだが…なぜか兄貴の腕がいつもよりガツチリと食い込んでくる。そのうえ妙に考えるような間の後、今まで一度も聞いたことのない、もの凄くマジメで緊張した声が聞こえた。

「…あ、のさ……………なあ…守?オマエ…ぶっちゃけ中肉とはどうなんだ?当然、俺だつて満や光と同様に心底反対だ。でも……………くくく…悔しいが、なんか今の守は凄く穏やかに感じるっつか、なんっつか…。だからさ、教えてくれ。その…アレだ、オマエは幸せなのか?アイツラと居て…幸せ、なのか…?」

はあ!?

一体どうしちゃったんですかー!?

ブツチギリでバカだろっ。(後書き)

夏より体調不慮&腱鞘炎でなかなか更新できませんで…(汗)
ようやくボチボチと更新を再開できそうですっ。

迷いの部屋。

唐突すぎる質問に慌てて兄貴の顔を確認しようとするも、相手は相当な力で俺をガツチリとその広い胸に抱きすくめている。

変なの。

兄貴から微かに感じる体の震えのせいかわからないけど。不思議といつものウザイ存在と思えなくなつた。うん…なんか、痛みに耐えるような身を切る悲壮感に近い雰囲気俺にそう思わせるのかも。

「最初で……最後だ。もう絶対、生涯二度と後にも先にも一回しか聞かない。だから頼む、本気で答えてくれ。俺はどうしても守の口から直接聞きたいんだ。今、オマエは……幸せ、なのか？」

「つつ……！」

笑っちゃうよな。

さっきのケンと名乗った男にはアレだけの啖呵を切つたのに、いざ身内の前になると妙な緊張感で口元が引き攣る。

でもさ、もし、ソレを言ったら兄貴はどうするんだろう……？俺を軽蔑する？気持ち悪いって思う？姉えさんや満に、両親に報告する？

もし……男の俺が、男の宏二を好きだつて知られたら、そうしたらさ？俺……みんなに嫌われちゃうのかな……。

ほんの少し……うん、チョットだけ悲しい気分になつたけど。でも、俺は“絶対”自分の気持ちの間違つているとは思わない。

誰に何を言われたつて、俺は宏二を好きだ。だから幸せかと聞か

れば、不思議と揺るぎない誇りが胸に満ちる。だから小さく口を開き、気付かれない程度の深呼吸をした。でもその後にしつかり胸を張って自信満々で答えてやる。

「ばーか。決まってるんだろ？……つつか、そもそもなんイチイチ聞いてんじゃねーって！」

ガンッと兄貴の足を踏みつけて、痛みをひるんだ隙に逃げ出すと、思いつきアツカンベーをしてやった。

「ぐおつー!!」

「じゃーな。くれぐれも夕里さんの言い付けを忘れんなよ？でなきや二度と来てやんねーかな！バカ兄貴ー!!」

「そ……そんなあゝ。ままたあゝんつ」

捨て犬みたいな情けない声を出す兄貴を残してサツサと病室を後にし、好奇の視線渦巻くナースセンターで夕里さんの場所を聞いて足早に向かう。

聞きたいコトが山ほどあった。

包帯のコトとか、とにかく色々と両手で掴みきれないくらいあり過ぎて、整理するのが難しい。しかも病院内と言う短い移動距離の中だ。俺は自分の中で出来る限りの言葉を捜す。

「たく、高校受験の時に頭を掻き毟るくらいに苦しんだ、現国のチョー難問を必死に考えていた時みたいだ。

マジ、あったま痛いっす！」

でもとりあえず、ナンとかカンとか急ごしらえの質問を整理して夕里さんの部屋の前に辿り着ついた頃には、多少なりともマシになったと思う。

扉の前で頭がクラクラするくらい深い深呼吸を三回してからノックをすると、中からよく通る凜とした声が響いて来た。

「どうぞ入って！」

「はっ…はいっ！失礼しますっ」

もう一回だけ深く深呼吸してから恐る恐る無機質な鉄のドアノブを捻って顔を覗かせた。すると、ソコはまるで宏二の部屋のようにスツキリと、驚くほど白くて一切無駄を省いた機能的な空間が広がっている。

「ごめんなさいね、少し散らかってるんだけど……」

困ったような、恥ずかしそうな表情を浮かべた夕里さんが、机の上で小山のように積み上げられた書類越しに視線を向けてくれた。

あれ？病院ってカルテ以外にこんな紙の束ができることなんてあるんだ……。

「とんでもない！俺の部屋に比べたら、アリエナイくらいスツゲー綺麗ですよっ」

「ふふ、アリガト。まあ立ち話も何だから、どう？座らない？」

ともすれば冷ややかな印象を与えかねない美貌が、ほんわかと暖かな温度を持つ。

「あ、はい！」

俺は身振りで示されたソファへと素直に従って腰を下ろすと、夕里さんも書類をデスクに下ろし、傍にあった小さな冷蔵庫から缶ジュースを二本出して真向かいに腰を下ろした。

目の前によく冷えた缶が置かれ、控えめの冷房のせいなのかあつという間に汗をかきはじめる。

「あ、ありがとうございます」

ヤバイ、なんだろうこの気まずい雰囲気。メツチャクチャ緊張する。

ともかくお互いなにから切り出したらいいのか分からず、所在なげに缶ジュースを手にとってプルトップを開けて口を付けた。

でもさすがタ里さんとも言うべきか。鮮やかな微笑み一つでアツサリその場の雰囲気切り替える。

「ふふ、元気そうで嬉しいわ」

「はい。でも……その…タ里さんは……」

「ああコレね？ま、こんな程度で済んで私はラッキーよ。………でも」

ふとタ里さんは苦悶という名にふさわしい、沈痛な表情を浮かべた。数限りないタ里さんとの接触のなかで、こんなに心底苦しそうな表情はついぞ見たことがない。

「一人……瀕死の重傷を負ったわ。コレは言うべきかどうか迷うけど……その子は貴方に会うまでは色んな意味で宏二のお気に入りだったの」

「!?!」

宏二のお気に入り……。

その言葉にちょっとビックリして、思わず手の中にある缶を落としそうになった。慌てて手に力を入れると、柔らかいアルミは小さな音を立てて小さくへこむ。変だな、なんか俺の中でも同じ音がした。

「覚えてるかしら？水族館へ行った翌日から暫く誰とも連絡がつかなかったでしょう？あの日の早朝、ココが襲われたの。もし、あの子が一人で朝霧^{あさぎり}さんを護るだけだったらこんなコトにはならなかった。でも運悪く私がココにいた所為で……」

「夕里、さん……？」

夕里さんの言っている意味が分からない。

それは彼女が常に冷静で感情にブレを許されない医師ではなく、一人の人間として必死に涙を堪えていたから。

唇の端を噛み締めて、夕里さんは意を決したように大きく一回深呼吸をすると再び話し出す。

「ごめんなさい。どうやらまだ動揺しているみたいね……。でも本当は私とその子、言葉もさして交わす間柄ではなかったの。けれど私が朝霧さんの健康管理を任された時以来、片時も離れず私をサポートしてくれていた。いわばケンが宏二の手となり足となり、目や耳を兼ねるのと同じ様に、あの子は最早私にとって体の一部だったみたいね。馬鹿みたい、まさかこんなに誰かを失うのを怖いなんて思う日が来るなんて思わなかったわ。しかも医者だというのに……なんにも出来ずにただ指を啜^{すす}りて見ているだけだったなんて」

涼やかな夕里さんの目尻から、スルリと一粒の雫が流れ出た。

ところが俺ときたら、情けないにも程がある。女の人が泣いているのに、一体どんな言葉をかけていいのか分からず頂垂れたんだから。

さらにもっと最低なのは宏二のお気に入りだったって子にばかり意識が行って、自分を持って余し、苛立ちに心が揺れて……息苦しさで頭がくらくらする。

俺は夕里さんを慰めることすらできないばかりか、胸の奥に渦巻く気持の悪い感情に表情が険しくなり、元からあるかないか分から

ない余裕が一気に底をつく。

自分でも分かるくらい……きっと情けない顔をしている。

「幸いなことに、その子は孜の処置と管理を受けて辛うじて命を繋ぎ止めたわ。ね、聞いてくれる？私……本当は弟である孜に激しく嫉妬しているの。だってあの子は生まれながらの医療の天才なのよ。どんなに必死に勉強して努力しても、私に出来ないことをいとも容易くやってのける。孜になら助けられる命が、私には助けられない……こんなに惨めなことってないわよね」

「……………」

「ああごめんなさい。おかしいわ……どうも守クンって話しやすいのかしら。余計なことを言ってしまったようね。忘れてちょうだい」

「……………」
「そうだわ！せっかくココに来てくれたんなら……会っていかない？」

さっきと打って変わって妙に明るい夕里さんの声で、気持の悪い冷や汗が流れる感覚と共に体が強張った。一体、俺はなにを怖がっているんだろう？なんでこんなに手の平に汗が滲んで嫌な感じがするんだろうか。

胃がキリキリ音を立て、いまにも擦じ切れてしまいそうになる。俯いたまま、どうにか掠れる声を絞り出して夕里さんに問いかけた。

「誰に……ですか？」

もし、もしも……夕里さんの答えしだいで俺はきつとこの場を逃げ出してしまうかもしれない。

そもそも俺は元から自分を強い人間だなんて思ったことなんか一度もなかった。第一、最初は宏二が怖くて気絶したことだってあるくらいなんだから。

なのにそんな弱い俺が、へらへら笑って誰でも彼でも受け入れるなんてできっこないだろう？

俺のそんな複雑な気持ちを伝えられぬまま、祈るような思いで夕里さんの言葉を待った。まるで一時間にも思えるほどの一拍の後、夕里さんのとても穏やかで優しい声が問題の人物名を告げる。

「朝霧さん。……………宏二の、お母さんよ」

「っ!!」

ぶつちやけ予想していなかった言葉に激しく動揺して、目の前にあったローテーブルのガラスの天板に激しい音を立てて両手の平を叩きつけていた。

迷いの部屋。(後書き)

お久しぶりの更新で申し訳ありません……。
いましばし、守と宏二の絡みはお待ちくださいッ!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4903i/>

腹グロ王子と子羊ちゃんsideM 6

2011年10月17日02時56分発行